



米ユタ大留学時、コルフ教授にはお世話になった

京都大学医学部卒業後、心臓外科医をめざす。しかし、再び壁にぶつかるところになる。学生時代から、心臓しかないと思っていました。物理は得意だけど、内分泌系はどれも苦手。心臓なら物理の力学で理解できるからです。まずは、京都大学の医局で心臓外科を学ぶと第2外科を希望しましたが「女はいらない」と門前払い。女性の当直室もトイレもないから、というのです。

日から手術室に入れてもらい鍛えられました。迎えてくれた伴敏彦心臓血管外科部長からは、医師としての姿勢を学びました。

心根はやさしい。私にとっては、お父さんのような存在です。小倉時代に、心臓外科医として生きようと覚悟を決めた。

心臓外科への思い断えず、九州で研修医に

昼夜問わぬ診療の日々、博士号得て米留学

ユタ大で出会った権威、研究者魂を学ぶ

「夜10時半の男」と呼ばれた伴先生は、毎晩必ず10時半になると患者をみて回るため病院に現れる。心から患者さんを大切にしている頭が下がりました。何かに失敗すると、本当に悔しがる。失敗を隠さないで「あれがダメだったんだ」と自己分析する。言葉づかいはぶっきらぼうで、今でも「おめえなあ」と呼ばれるほどですが、

もともと手を使うことが好きでしたし、心臓手術は自分が手を下した効果が見やすい。手術の前にいったん心臓を止め、手術が終わると再び戻す。手のひらからパワフルな動きが伝わってくる。やりがいを実感する瞬間です。

駆け出しのころには、苦い経験もしました。当時は手の施しようのなかった重度の心不全の患者さ

たが、苦ではありませんでした。熊本赤十字病院を経て、東京女子医科大学へ。女子医大からは海外に留学する医師も多く、「世界にはほたきたい」という思いもあった。

34歳で博士号を取得。同じ年に、人工心臓の研究で世界的に有名な米国のユタ大学に留学しました。当時は、バイオマテリアル研究の全盛期。私も最初は抗血栓性材料の研究を手がけ、後半は心臓ポンプの研究に移りました。

留学先で目を見張ったことが3つあります。まずは牛やヒツジな

ど大型動物での心臓実験が進んでいたことです。当時日本ではせいぜい犬くらいでした。各分野の専門家がチームを組んで心臓実験を行うことも驚きでした。獣医、さらには電気や材料などの技術者が協力する。医師だけで行う日本とは大きな違いです。

あるとき、アメリカ人のおじいさんが、若い女性をひとり助手にして細々と実験をしている光景を目にしました。後でみると、なんと学長だとか。一方で、予算を獲得した准教授が大プロジェクトを率いていたりする。地位ではなく研究内容で予算が決まる。日本では考えられないことです。

ユタ大学には、「人工臓器の父」と呼ばれるウィリアム・コルフ教授がいたことでも有名です。コルフ教授との出会いは、留学3年目のこと。子ども用の補助人工心臓を子羊に埋め込む実験をするので手伝ってほしいと頼まれたのです。以来かわいがってもらい家族とのヒクニックにも誘ってもらったほど。コルフ教授からは、決してあきらめない研究者魂を教えられました。アメリカのお父さんのような存在でもありました。

日本に帰国するとき、「実験を続けてくれ」と小さな人工心臓を手渡されました。これが後に、補助人工心臓を開発するにあたり役立つとは考えもしませんでした。

聞き手は編集委員 野村浩子

患者のためあきらめない

③